

新学習指導要領に対応する地歴科教育の試み ——高等学校「世界史 B」を題材に——

高 津 純 也*

Trial of the geography and history education corresponding to the new
course of study
about high school “World history B”

Junya TAKATSU

要 旨

新学習指導要領「世界史 B」に対応すべく、検定教科書がどのように記述を改めたかを具体的に調査した結果、課程「主題を設定して行う学習」に関する各項目に対応する箇所では全く新たに頁が追加されたに等しく、またその内容は教科書ごとに根本的に異なると知れた。この課程が生徒自身に主題を設定させて行われる以上、各クラスごとに全く異なる授業が展開されるのは自明で、教科書は授業のマニュアルとしての役割を極めて限定的にししか果たし得ない。

そこで、教員が「主題を設定して行う学習」各項目の授業を実施する際に注意すべきと思われる点について指摘した。この課程を上手く活用すれば、歴史を学ぶ際に本質的に心得ておきたい「因果関係を理解することの重要性」や「地域間交流を意識することの重要性」に生徒が気づくこと、さらには「資料を分析して事実を特定し歴史像を描くことの意義」そして「歴史を学ぶという、そのこと自体の意義」まで習得すること、が可能になると考える。しかしその成否は、教員の指導力に全て懸かっているとと言える。

将来は教科書の記述も現場からの要望に応えるよう訂補されていくことが期待されるが、「主題を設定して行う学習」において教員の指導力が授業の質に直結するという点は常に不変だろう。従って今後、現場での経験が情報として蓄積され、それを共有し討議するなどといった、教員および教科書作成者側の努力が、授業の質的向上に必要であろう。

キーワード：新学習指導要領、高等学校、地理歴史、世界史 B

*准教授 中国古代史

はじめに

周知のごとく、平成 21 年 3 月 9 日に高等学校学習指導要領が改訂され、平成 25 年度の入学生から新指導要領に基づく学校教育が開始されることとなった。従って、本稿を執筆している時点では、新指導要領に即した検定教科書は 1 年生に使用され始めたばかりであり、それに対応した指導も当然、高校の現場において実践され始めたばかりの状況にある。

言うまでもなく、学習指導要領が改訂されたからと言って、各教科において要請される指導内容が根こそぎ変更されるわけではない。むしろ、旧指導要領から継承される内容が大部分であるわけだから、従来から培われてきたノウハウがそのまま使える局面が圧倒的割合を占めるはずである。しかし、新指導要領に新たに盛り込まれた部分については、現場の教員がそこに記述されている指示を具体化して実践する必要があるとあり、従って個々の現場に即した創意工夫を個々の教員がそれぞれ進めてゆく必要があるということも、また論を待たないであろう。

導入後初年度入学の生徒に対する指導が完遂するまでに今から 3 年弱を要する上、その実践の結果を踏まえた改善がなされ、その積み重ねを基として新指導要領に対応した指導法が個々の教員の中で一定程度確立するまでには、さらなる時間を要する。それまでの間、指導法の試行錯誤が続くことは想像に難くない。

以上のことは全ての教科に共通する話であるが、そのうち地理歴史科指導要領の改善点についての記述の中に、「…地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること、社会的事象の意味、意義を解釈すること、事象の特色や事象間の関連を説明すること、自分の考えを論述することを一層重視する」という一節がある。この方針を受け、「世界史 B」の指導要領の記述には、後に詳述するように、「主題を設定して行う学習」が多くの項目において盛り込まれている。

「主題を設定して行う学習」とは、生徒自身がそれぞれ自らテーマを決め、自ら調べ自ら考えることを求める、そのような学習課程である。そのように主体的な活動を生徒に行わせる課程は、「世界史 B」の従来の指導要領にもなかったわけではないが、今回大幅に増強する形で改訂された。教員がそれを指導するにあたっては、単に教壇の上から生徒たちに向かって歴史的事象を講義するのとは、全く異なるノウハウが必要となるはずである。また、教科書という、教員の指導と生徒の学習とを仲介するツールにおける該当箇所の記述に対しても、単に歴史的事象を叙述するのとは全く異なる方向性の文章が求められるはずである。

そこで本稿では、新指導要領に対応した「世界史 B」の指導法を確立するための参考とすべく、所謂検定教科書が上記の文部科学省の指示に対処するために、今回の改訂で内容をどのよ

うに改めたのか、その具体的な諸点を明らかにしたい。そして、その新たな記述を現場ではどのように具現化して生徒に指導することが可能か、その方向性を模索してみたい。

なお、以下の論考においては、特に教科名を記さない限り、「地理歴史」中の「世界史 B」に限定して議論を進める。

第 1 節 学習指導要領の主な変更点

文部科学省が平成 21 年 3 月 9 日に公示した新たな高等学校学習指導要領の、地理歴史科に関する記述の改訂のあらまは、同じく文部科学省が作成した『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』(以下『解説』と略称)⁽¹⁾における「第 1 章 総説」の「第 1 節 改訂の趣旨」にまとめられている。

その冒頭では「改訂の経緯」、次いで「改訂の趣旨」が述べられているが、本稿では後ほど触れることとして、先に「改訂の要点」の内容について概観することにする。

「世界史 B」については、改訂の要点として以下の三点が掲げられている。

- ア 導入時期の学習における地理・日本史との関連付けと、中学校社会科との接続に配慮した内容構成
- イ 世界史の中での日本の位置づけに留意した内容構成
- ウ 主題を設定して行う学習をすべての大項目に設定

そしてその三点それぞれに解説文が付され、指導要領の内容の具体的な変更点が記されている。それらを要約し、かつ変更部分を従前の内容と比較してみると、以下のようになろう(本稿では便宜上、変更点 A～C と呼称する)。

- A …大項目「(1) 世界史への扉」に含まれている 3 つの中項目のうち、「ア 世界史における時間と空間」に替えて「ア 自然環境と人類のかかわり」を設定した。残る 2 つの中項目は、従前の「イ 日常生活に見る世界史」「ウ 世界史と日本史とのつながり」から、今次の「イ 日本の歴史と世界の歴史のつながり」「ウ 日常生活にみる世界の歴史」へと、ほぼ同内容のまま継承する。但し、従前は中項目アイウから適宜選択して二つ程度主題を設定して学習を行うことを指導上要請していたが、今回改訂で、アイウのそれぞれから一つずつ主題を設定することに変更した。
- B …大項目「(4) 諸地域世界の結合と変容」の A を「アジア諸地域の繁栄と日本」、同じくオを「世界市場の形成と日本」、(5) 地球世界の到来」のオを「グローバル化し

た世界と日本」とした（従前の指導要領における、それら三項目と同内容の箇所の項目名称は、順にそれぞれ「アジア諸地域の繁栄と成熟」「世界市場の形成とアジア諸国」「冷戦の終結と地球社会の到来」であった）。これらの項目名変更象徴されるように、それぞれの時期における日本の動向を世界の歴史の中に明確に位置づけるとともに、日本を含む東アジア世界の形成過程に関する説明や、主題を設定して行う学習にこれからの日本のあり方を展望させる課程を導入するなど、日本の歴史を世界的な視点から取り上げるような記述を多方面に設けた。

C …大項目「(2) 諸地域世界の形成」に「エ 時間軸からみる諸地域世界」を、「(3) 諸地域世界の交流と再編」に「エ 空間軸からみる諸地域世界」を、「(4) 諸地域世界の結合と変容」に「オ 資料からよみとく世界の歴史」を、「(5) 地球世界の到来」に「オ 資料を活用して探求する地球世界の課題」を、それぞれ新設し、これらの各々の課程において主題を設定して行う学習を実施することとした。上のAで述べたように、従前より大項目「(1) 世界史への扉」において主題を設定して行う学習が設定されていたが、今回改訂により、同様の学習が大項目(2)～(5)においても実施されることになる。すなわち、「世界史B」の学習課程全体の中で、主題を設定して行う学習を数次にわたって枠組みを変えつつ実施し、段階的・継続的に指導することで、歴史学習の基本的技能を習得させ、言語活動の充実を図ることとなった。

このような変更が指導要領の文面に明示されたことは、当然教科書の記述にも大きな影響を及ぼす。

このうち、変更点Bに関しては、既に教科書の執筆者（歴史研究者）の間で知識として共有されている歴史的事実や依拠する学説を教科書向けに文章化する際に、指導要領とその解説の新たな要請に添う形で、明示する事項や文面の方向性をアップデートしてゆけばよいであろう。すなわち、以前から改訂を受けつつ継承されてきた教科書の文章の該当部分それぞれにおいて、その当時の日本の状況や立場などについての明確な説明を盛り込んだり、ビジュアル面の工夫やコラムの新設など然るべき対処を行ったりすることで、Bの要請には応えられると考える。

しかし、AとCについては、それとは別の根本的な工夫が必要であろう。

変更点Aは、教科書冒頭に置かれる大項目「世界史への扉」に関する変更点である。この大項目について、新学習指導要領には、「適切な主題を設定し考察する活動を通して、地理と歴史への関心を高め、世界史学習の意義に気づかせる」とある⁽²⁾。この大項目は改訂前から存

在しており、その「主題」の設定の仕方が変更された、ということである。一方変更点Cは、そのような「主題を設定して行う学習」を、「世界史の扉」で行うのみならず、「世界史B」の全ての大項目、すなわち全課程の要所要所で行わせることにした、ということである。

ここで要請されている新たな課程に対処するために教科書に盛りこまれる記述とは、生徒個人が自ら歴史的テーマを見つけて探求する活動、その呼び水となるような記述でなければならぬはずである。歴史的事象がそこで説明されるとしても、それはあくまで生徒による探求のサンプルとしてということになる。

そのような文章は、我々が常識的にイメージするような世界史教科書の構成－歴史上の重要事項や歴史の展開過程を、時代ごと地域ごとに区切りながら説明し学習させてゆく－からは独立して存在せざるを得ない。そして、そこでサンプルとして取り上げられる歴史的事象も、また生徒の主体的学習を喚起するために記されるであろう文章の表現も、その具体像は各教科書を編纂する側に一任されていることになる。教科書使用者側からの反応が得られてからであれば話は変わってくるかもしれないが、新指導要領の公示を受けて初めて編纂された今回の教科書の記述は、どの教科書においても、いずれも全くの白紙から立案され討議を経て設計されたものであるはずである。

唯一、そのガイドラインとなり得たと考えられるのは、『解説』中にある、今回改訂の経緯と趣旨について記された文章である⁽³⁾。そこでこの文章について、本稿に関連する部分を抜粋して要約すると、以下のようなだろう。

我が国の児童生徒について、各種の調査から、思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題などに課題が指摘されている。このため平成17年2月に文部科学大臣から中教審に対して、国の教育課程の基準全体の見直しについて検討するよう要請が出され、審議の末に平成20年1月に答申が行われた。そこで各学校段階や各教科などにわたる学習指導要領の改善の方向性が示されたが、その基本的な考え方として挙げられた項目の中に、「思考力・判断力・表現力等の育成」という一項が存在する。そして、この実現のために「観察・実験、レポートの作成、論述など知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて充実させる」「各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む」必要がある、と記されている。

そして地理歴史科の改善の基本方針について、以下のような点が示されている。

- ・ 社会的事象に関心をもって多面的・多角的に考察し、公正に判断する能力と態度を養い、社会的な見方や考え方を成長させることを一層重視する

- ・社会的事象に関する基礎的・基本的な知識，概念や技能を確実に習得させ，それらを活用する力や課題を探究する力を育成するため，地図や統計など各種の資料から必要な情報を集めて読み取ること，社会的事象の意味，意義を解釈すること，事象の特色や事象間の関連を説明すること，自分の考えを論述することを一層重視する
 - ・我が国および世界の成り立ちや地域構成，今日の社会経済システム，様々な伝統や文化，宗教についての理解を通して，国際社会で主体的に生きるとともに，公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する
- これを踏まえた，改善の具体的事項は以下の通りである。
- ・我が国および世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を一層深めさせるよう，科目間の関連を重視する
 - ・地図を活用した学習を一層重視する
 - ・「世界史 B」については，地図，年表，資料などを活用し，諸地域の地理的条件や日本の歴史との関連に留意しながら，世界の歴史の大きな枠組みと流れを理解させ，文化の多様性・複合性に関する認識を深めさせるとともに，適切な主題を設定して追求する学習を一層重視して，世界史の学び方や歴史的思考力を培うようにする

以上のような方針に基づいて，上記 A～Cに見られるような変更が，教科書において施されることになったわけである。繰り返しになるが，このような経緯および趣旨が示す方針に沿い，A～Cを反映した記述になっているということ，という条件さえ満たせば，具体的内容は教科書編纂者に任されており，特に A および C に関わる記述は教科書ごとに千差万別になり得る，と考えられる。

それでは，実際に完成し検定を通過して流通することになった教科書は，どのような記述によって今回改訂に対応したのであろうか。十を超える検定教科書の中から実例を挙げて紹介したい。ここでは，現在の検定教科書のうち最も古くから版を重ねてきており，未確認ではあるが全国的に屈指のシェアを持つと思われる山川出版社の教科書『詳説世界史 B』と，比較のために東京書籍の教科書『世界史 B』とを取り上げることとする。

第 2 節 検定教科書の記述の実例

81 山川世 B304『詳説世界史 B』は，2012 年 3 月 24 日に文科省検定を通過した，新指導要領に準拠した高等学校地理歴史科用教科書である⁽⁴⁾。

最初の版が発行されて以来、半世紀以上にわたり版を重ねてきた老舗教科書であり⁽⁵⁾、その間には幾多の改訂がなされてきたが、今回の指導要領改訂に伴い、改めて大幅に改稿された版が出されることとなった。

前節で述べた、新指導要領に明示されている新たな要請に対応するために、本教科書はどのような記述を新たに盛り込んだのであろうか。本節ではその点について具体的にまとめてみたい。

まずはそれに先んじて、本教科書の構成について概観しておこう。

巻頭の間絵、序文、目次に続いて、「世界史の扉」(①～③)が配置される。その後、「序章 先史の世界」を挟んで本文(第Ⅰ部～第Ⅳ部)が展開するが、その各部の内容は、指導要領の大項目「(2) 諸地域世界の形成」、「(3) 諸地域世界の交流と再編」、「(4) 諸地域世界の結合と変容」、「(5) 地球世界の到来」にそれぞれほぼ対応している。各部はそれぞれ数章に分かれて本文が展開するが、各部の冒頭には「概観」、末尾には「まとめ」と称する各2頁の文章が付されている。さらに各部「まとめ」のさらに次位には、新指導要領にある「主題を設定して行う学習」に対応する「主題学習」(Ⅰ～Ⅳ)の頁がそれぞれ設けられている。そして本文全体の完結後に、年表と索引が付される。これが本教科書の構成である。

それでは、前節でAに説明した変更点への対処から見えていこう。すなわち大項目「(1) 世界史への扉」に含まれる3つの中項目のうち、新たに「ア 自然環境と人類のかかわり」が設定されたことへの対処であるが、本教科書には、「世界史の扉① 気候変動と私たち人類の生活」と題する2頁が設けられている⁽⁶⁾。

ここでは、1815年にインドネシア・タンボラ火山が大爆発した影響で、翌年に欧米では極端な冷夏となったこと、あるいは中世ヨーロッパが温暖期であったのに対して近世から19世紀半ばまでは小氷期とも呼ばれるほどの寒冷期となったこと、などの気候変動の実例を挙げた上で、その小氷期にはそれまでヨーロッパで顧みられなかった南米原産のジャガイモが、悪条件下でも栽培可能な作物と認知されて多くの人々を飢餓から救い、以後ヨーロッパ社会に普及したことを述べ、このような連鎖を理解するためには「地球的視野にたつてその多様な自然環境と人間の営みの関係を考えることが必要である」と説く。その上で「自然の驚異や、伝染病の爆発的拡大などの危機が人類に与えてきた影響と、その対応を具体的に調べてみよう」と読者(生徒)に促して、この一節を結んでいる。

次にBの変更点、すなわち日本の歴史を世界史的視点から取り上げるような記述を拡充させることに関してであるが、例えば3～6世紀の東アジア古代史を説明した箇所における日本の国家形成についての記述や⁽⁷⁾、隋唐帝国と周辺諸国の動向を説明した箇所における日本の律

令国家体制についての記述⁽⁸⁾、また所謂鎖国時代における日本の内政外交に関する記述⁽⁹⁾が増補されるなどの修正が目立つものとして挙げられる。しかし、前節で述べたように、特に近代史の部分において項目名が「それぞれの時期での日本の動向を世界の歴史の中に明確に位置づける」ように変更されているにもかかわらず、肝心の当該項目の本文においては、その変更の指針に沿うように記述が修正された箇所はあまり多くないという事実がある。従って、読む側が従前より日本の歴史的位置を強く意識できるようになるという印象は、筆者が読んでみた限り抱くことはできなかった。

さて、変更点Cについて見てみよう。これは前節で述べた今回改訂の諸点のうち、新たな記述の導入が最も多く必要になると考えられる点である。

上記の、本教科書の構成について簡単にまとめた中でも触れたが、本文第I部～第IV部それぞれの末尾に、「主題学習」の頁が付されている。各々の名称は新指導要領の記載に準拠しており、第I部から順に「I 時間軸からみる諸地域世界」「II 空間軸からみる諸地域世界」「III 資料から読みとく歴史の世界」「IV 資料を活用して探求する地球世界の課題」となっている。

それらの頁の内容であるが、まずIでは、冒頭の総括的説明に続き「探求のポイント－歴史の流れを理解するために」と銘打ち、「何をとき明かすのか」「年表をつくってみよう」「事実の因果関係を考えてみよう」「歴史の流れをつかんでみよう」という諸点を掲げ、生徒が自ら主題設定する際のガイドラインを示している。次いでその主題の一つの実例として「課題：ローマ－世界帝国への道」を設定し、ローマ史における歴史的事件の年代順の整理、年表の作成、因果関係の推理を行ってみせている⁽¹⁰⁾。これによって、それに準ずる形で生徒が主題学習を進めることを促していると理解できる。すなわち、生徒が「主題を設定して行う学習」を実行する際の具体的作業を順を追ってガイドすることに重きが置かれていると察することができよう。

II以下も同様の構成である。IIの「探求のポイント」では「諸地域世界を理解するために」と銘打ち、諸地域世界が形成される要因、諸地域世界の交流の実相、諸地域世界の交流圏の近代以前と以後との比較、といった着眼点を提示し、「課題」では「近代以前の交流圏」を設定して、イブン＝バトゥータが訪れた都市名・地名を地図上に落とし込み、当時の商業ルートとの関連性を考える、という実例を掲げている⁽¹¹⁾。IIIの「探求のポイント」では、「資料を深く理解するために」と銘打ち、資料が作成された時期・状況や目的など背景を知ること、資料を細部まで読んで気づいた点を挙げること、読後にはさらに深く探求したい点を挙げるとともに関連する資料を渉猟すること、といった着眼点を提示し、「課題」では「異文化との出会い」

を設定して、マカートニーの中国訪問使節日記をかなり長く引用し、彼の中国観と、背景となる時代状況とを関連づけて考える、という事例を掲げている⁽¹²⁾。そしてIVでは、「探求のポイント」において「資料を広く活用するために」と銘打ち、数値情報たる統計を関連資料と対照させることで幅広く活かす、という着眼点を提示し、「課題」では「世界の食糧危機問題を考える」を設定して、サハラ以南アフリカの飢餓人口の棒グラフ、世界の穀物の需給の推移の折れ線グラフ、ソマリア難民を写した写真を掲げ、それらについて文章で若干のヒントを与えることによって、今日存在する世界的課題と、それへの従来の取り組みと問題点、そして改善策などについて思考・議論することを促している⁽¹³⁾。

以上、山川出版社『詳説世界史B』が、学習指導要領の今回改訂に対処すべくどのような形で記載を変更したか、簡単にまとめてみた。その結果、AとCに含まれる変更諸点に対しては、一つ一つ対処するような形で然るべき箇所新たな記事を挿入している一方、Bに含まれる変更諸点に対しては、小見出しの名称を変更するのみで本文にはあまり手を加えていないと見ることができた。すなわち、本書の大部分を占める歴史叙述においては、基本的に改訂前の内容を踏襲し、その流れを止めて挿入される頁である「歴史への扉」「主題学習」において大きな変更を行っている、とまとめられる。

一方、東京書籍『世界史B』（2東書世B301）⁽¹⁴⁾はどうであろうか。

まず、本教科書の構成であるが、序文・目次の次位に「世界史のとびら」（1～3）が配置され、その後に本文（第1編～第5編）が展開し巻末に索引を付す、という大まかな流れは『詳説世界史B』と変わらない。この点は各教科書とも差の付けようがないとも考えられる。

そこで本文に目を向けると、まず『詳説世界史B』が四部構成であるのに対し本書は五部構成となっている。これは、指導要領の大項目「(5)地球世界の到来」に対応する近現代史の記述を第二次大戦終結をもって前後に分割し、それぞれ第4編・第5編と銘打っているためである。それに先立つ第1編～第3編は、『詳説世界史B』同様、指導要領の大項目「(2)諸地域世界の形成」、「(3)諸地域世界の交流と再編」、「(4)諸地域世界の結合と変容」にそれぞれほぼ対応する。但し各編を構成する章の立てかたやその順序について対照すると、両者に差異のある箇所も少なくない。

それでは、今回の変更点A～Cへの対処を見てみよう。まずA、すなわち「世界史のとびら」に「ア 自然環境と人類のかかわり」が設定されたことへの対処であるが、本教科書では「世界史のとびら1 自然環境 世界史の舞台」を設けた⁽¹⁵⁾。地球の各地域の気候条件や地理的条件が、それぞれどのように、どのような農耕文明を生み出したかを解説し、末尾には「世界各地の農業の特色について、調べてみよう。その際、各地域間の共通点や相違点をまとめ、それ

らと各地域の歴史との関係についても、考えてみよう。」と課題を提示する。『詳説世界史 B』の該当箇所ともども、世界史学習の導入として手堅い事例設定であると考えられる。

続いて B、すなわち日本の歴史を世界史的視点から取り上げるような記述の拡充であるが、唐の衰退期に遣唐使が停止された後も私貿易による大陸からの文物流入が継続したとする記述を追加したこと⁽¹⁶⁾を始め、モンゴル帝国と日本の関係、江戸時代初期の日本の対外関係、また明治維新前後の動向などについて、日本史に関する記述が拡充されてはいるが、抜本的なものではない。但し『詳説世界史 B』と比較すればやや追加量が多いように見受けられる。また本教科書では以前の版から、本文頁のサイドに設けられた数々の小コラムのうち、日本との関連を意識したもの（14カ所）について、日本列島を図案化した新たなマークを付し、かつ背景の色も他と変えることで一目でそれと分かるようにされており⁽¹⁷⁾、この点も含めれば、日本の歴史を世界史の中に位置づけるというねらいは比較的強く打ち出されていると言えるように思う。

そして C の変更点、すなわち新指導要領にある「主題を設定して行う学習」の拡充への対処である。

これに対応する頁は、指導要領の項目名「時間軸からみる諸地域世界」「空間軸からみる諸地域世界」「資料からよみとく世界の歴史」「資料を活用して探求する地球世界の課題」をそのまま踏襲する形で、第 1 編～第 3 編・第 5 編の末尾にそれぞれ設けられている。この点も、本文第 I 部～第 IV 部の末尾にそれぞれ付していた『詳説世界史 B』の対応に似る。

しかし、その四カ所の「主題を設定して行う学習」の頁の中身は、『詳説世界史 B』とは随分と異なっている印象を受ける。

まず「時間軸からみる諸地域世界」の頁⁽¹⁸⁾であるが、ここでは「ビザンティウム、コンスタンティノープル、イスタンブル」というサブタイトルのもと、この都市の歴史を2頁にわたって概述する。その文章の冒頭には、導入として「世界史の学習において、過去の膨大な歴史的事項のなかからテーマを設定し、関連する内容を年表などに整理することは、基礎的な作業の一つである。テーマに関連するものをぬきだしてまとめたり、比較したりすることで、理解をより深めることができる。」と述べ、文章の末尾には実際にこの都市の略年表を付している。そして頁の末尾に、「王朝、都市、宗教、文化などから一つのテーマを選んで、おもな出来事などを調べて年表などに整理し、気がついたことをまとめてみよう」と「課題」が提示されている。

つまり、『詳説世界史 B』の対応する頁と比較すると、生徒が「主題を設定して行う学習」を実行する際の具体的作業をガイドするという要素は、極めて少ない。イスタンブルという都

市の歴史をまとめた文章およびそれを年表化したものを示すという、「歴史的事項の羅列を整理し、年表を作成した」実例を示すことに比重が置かれているのである。

続いて「空間軸からみる諸地域世界」の頁⁽¹⁹⁾であるが、ここではマルコ＝ポーロ『世界の記述』に記されている諸都市のうち11の都市について、該書の記述の概要を列記している（各2行～8行程度、全2頁）。導入には「世界史学習の基本は、歴史的事実を把握し、それらの相互の関連を理解することである。そのためには、時間の流れに沿って歴史的事実をつなぎ、結びつける作業とともに、空間的な広がりやつながりに注目して、同時代のさまざまな地域を比較する作業が重要である。」との文章が置かれ、その後述べる11の都市について、ユーラシア大陸の地図にその位置を書き込んだ上でそれぞれの生活の違いやその背景について「より深く調べ、考えてみよう」と作業を指示している。また頁の末尾には「世界各地を旅行・訪問した人の記録を読み、その人が各地域をどのようにながめ、どう記録しているか、調べてみよう」と「課題」を提示する。

こちらは一見、『詳説世界史B』の対応する頁に類似する。かたやマルコ＝ポーロ、かたやイブン＝バットゥータと、好一對とすら言える。しかしこちらでも、『詳説世界史B』は「探求のポイント」に字数を多く割き、生徒に具体的作業をガイドする性格を強く打ち出しているのに対し、東京書籍版は『世界の記述』の文章そのものという「資料」を提示し、そこから何を読み取るかはほぼ完全に生徒に任されている。

三番目の「資料から読みとく歴史の世界」の頁⁽²⁰⁾はどうであろうか。ここには「歴史研究への挑戦」という、文字通り挑戦的なサブタイトルが掲げられている。その内実は、「人類の足跡を明らかにするには、歴史資料にもとづいた事実の特定という地道な研究と、事実相互の連関を解明して歴史像を描く、という解釈にあたる作業との、双方を欠かすことができない。」という解説のもと、実際に生徒に「資料を読み解く作業に挑戦してみよう」といざなうものである。そして前半に「文献資料への挑戦」という節を設けるが、そこには具体的な文献資料は提示されておらず、本教科書に抄訳を所収する『権利章典』『アメリカ独立宣言』『フランス人権宣言』を引き合いに、それらの主張の要点のまとめ、共通点と相違点の抽出、そして図書館やインターネットなどで全文を入手した上での分析、といった作業を促している。また後半の「非文献資料への挑戦」では、図像資料（ホガースの銅版画「ジン横丁」）を新たに提示した上で、その絵画に込めた作者の主張の分析や、当時の児童教育との関連の考察、といった作業を促している。

つまりここでは、前二者に比べ、具体的作業のガイドという性格は強い。しかしそれは、本教科書が指示した資料を前にした上での具体的作業のガイドであり、それを完了した上で生徒

に課す課題は「上の例などを参考に、文献資料、絵画、写真などを、各自で選んで読み解いてみよう。」と、極めて自由度の高い（逆に言えば、「素っ気ない」）ものとなっている。『詳説世界史 B』が「探求のポイント—資料を深く理解するために」を箇条書きで多岐にわたり列挙し、それを踏まえて具体的課題の例（マカートニーの日記を読む）に移っていくのとは、やはり大きく異なっていると言えよう。

最後の「資料を活用して探求する地球世界の課題」に至っては、わずかに「さくいん」の直前の1頁⁽²¹⁾、しかもその半分は「自分で資料を収集して考えて」みる際に参考とすべきウェブサイトのアドレスの列記（国連、日本国外務省、WTO、国立国会図書館、東京国立博物館など50カ所前後）で埋められている。「課題」としては、地域紛争の歴史的背景や現状、環境問題の現状やその原因、地球規模で活動するNGOの具体像、という、テーマの実例を挙げつつ、それらを参考に「これからの世界と日本のあり方や、世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会をどのようにしてつくっていくか（中略）自分で課題を見つけて探求しよう」と指示している。やはり、前述した『詳説世界史 B』の対応する頁に比べ、自由度が高い。

このように、「主題を設定して行う学習」の具体的内容は、両教科書で大きく異なっていることがわかった。いずれも文科省の新指導要領に従っているのは勿論であるが、生徒に何をどこまで提示し、何をどこまで考えさせ、何をどこまで実行させるのか、という方針において「教科書の個性」が強く出ているのが、大変興味深い。

以上、今回の学習指導要領変更に対する、二種の教科書の対応について論じた。とりわけ「主題を設定して行う学習」という、生徒の自主的な探求が求められる項目が大幅に拡充されたこと、かつその具体的内容が教科書ごとに大きく異なっているという事実は、教員に柔軟に対処することを求めるものであり、それは教員の力量に依拠するところが大きいと思われるのである。このような状況に対し、現場ではどのような教育を生徒に行うことが考えられるだろうか。節を改めて検討する。

第3節 新指導要領への対応の試み

前節の、新指導要領に準拠した教科書2点を分析した結果から、授業を担当する教員としては、教科「世界史 B」のカリキュラム中の4カ所に分散配置された「主題を設定して行う学習」をどのように実施するか、という点について対応を求められるであろう、と推察された。

授業に際して指針とすべき教科書の当該頁は、教科書ごとに差異が非常に大きいと知れたし、そもそも「実施例」が掲げているに過ぎない。従って、それを参考にしつつも、やはり教

員の創意工夫に依拠して実施することになろう。

そこで本節では、その実施の際に肝要になると考えられる点について私見を述べたい。

①「時間軸からみる諸地域世界」について

前出『解説』には、この項目について、「主題を設定し、それに関連する事項を年代順に並べたり、因果関係で結びつけたり、地域世界ごとに比較したりするなどの活動を行わせる」とある⁽²²⁾。

この学習活動で最終的に重要となるのは、歴史的事実同士を因果関係で結びつけることの意義を理解させることであろう。歴史的事実の抜き出しや年表の作成は、そのための手段に過ぎない。そして「主題の設定」は、その歴史的事実の抜き出しや年表の作成を行うにふさわしい舞台を用意することに過ぎない。この点に注意する必要がある。

筆者がそう考える理由は、歴史的事実の一つ一つには必ず「原因・背景」と「結果・影響」という、前後の時空への「継ぎ手」が存在するのであり、それらをセットで学んでこそ意味のある知識となる、そうでなければ単なる丸暗記、相互に孤立した知識の羅列になってしまう、と強く感じているからである。この陥穽に落ちることを回避し、有機的に運用できる状態で知識をストックしておくことの大切さを生徒に如何にして知らせめるか、という点が鍵となるだろう。

指導にあたって、生徒に自身で探求した成果を説明させたり発表させたりすることが促されているが、それに際してもこの因果関係の重要性を理解させるという目的を常に意識する必要がある、さもないと手段の目的化が生じてしまうと思われる。

②「空間軸からみる諸地域世界」について

『解説』には、この項目について、「同時代性に着目して主題を設定し、諸地域世界の接触や交流などを地図上に表したり、世紀ごとに比較したりするなどの活動を行わせる」とある⁽²³⁾。

この学習活動を通じて生徒に会得させるべきポイントは、教科書にあっては基本的に個々の地域世界ごとに区切られて叙述されている歴史的展開に、実際には地域世界相互間の関わりも相当程度影響しているという事実を一般化して再認識させる、ということであろう。

前近代においては、交通・通信手段が発達の一途をたどっている近現代の世界と比較して、地域世界相互間の影響関係は相対的に小さいわけであるが、それでも地域間の交流は無視できない力を持ち、個々の地域世界は外部からも影響を受けて歴史を展開してきた。このような認識は広く首肯されるであろうし、「当たり前」とさえ受け取られよう。しかし実際に高校世界

史の授業を展開するにあたっては、例えばモンゴル帝国治下の東西交流や所謂「大航海時代」といった、広域的交流が顕著に視認できるケースのみに限って地域間交流を話題にしがちである。

生徒に地域間交流の重要性を説くと言っても、そのような目立つケースが先に少数用意されている状況では、生徒は地域間交流の盛んだった時代を特殊事例として受け止め、むしろそれ以外の時空における地域間交流の重要性を矮小化して理解しかねないと考える。普段から歴史地図を折に触れて利用するなどして、地域間交流というテーマをその濃淡にかかわらず意識させておくことが、本項目の活動、すなわち主題を生徒自身に設定させて作業を行わせるための下地として必要になるだろう。

③「資料からよみとく歴史の世界」について

『解説』には、この項目について、「資料を選択して、資料の内容をまとめたり、その意図やねらいを推測したり、資料への疑問を提起したりするなどの活動を取り入れることは大切である」とある。そしてその活動を通じて生徒が習得すべきは、資料に対する多面的な追求を行うことで生徒自らが歴史像を形成すること、また世界の歴史に対する理解を資料に基づく形で行うこと、とされている⁽²⁴⁾。

このことを生徒に習得させるのは、前二者に比べて難易度が高いと言えるだろう。作業においては他にもまして指導する側の力量が問われると思われる。

歴史を学ぶということは教科書に記されているような歴史的事項をマスターするということではない、過去の人間の営みである歴史資料を分析して事実を特定し歴史像を描くことである、と唱えるのはたやすい。しかしその実践を高校生に求めるのは難しいと考える。

①や②で述べた活動、すなわち生徒に「因果関係を理解することの重要性」や「地域間交流を意識することの重要性」に気づかせ、それを念頭に置きつつ世界史を学ぶ習慣をつけさせるという活動を通じて、生徒が会得できるのは、世界史を理解する上でのスキルであり、生徒がまず欲するのもそれである、と筆者は考える。しかし、教科書から遡って一次資料（その邦訳も含む）にまであたらせ、その行為が歴史を学ぶ上で如何なる意味を持つのかまで理解させるという活動は、さらにその先、歴史学の基底部に触れる活動ということになるだろう。それを全面的に実践できるとすれば、大学の専門課程以降のことになるのではなかろうか。

高校世界史においては、そのような「体験」を幾ばくかさせることで、歴史研究の世界の実相を知ってもらい、歴史学に対する生徒の興味を喚起することが出来れば、それで成功の部類であろう⁽²⁵⁾。それでも意味のあることである、という前提でこの活動は行うべきである。

あるいは、この項目は次項の「資料を活用して探求する地球世界の課題」の活動につなげる目的で設定されているとも読み取れるが、その実践には問題がある。この点については次項で述べる。

④「資料を活用して探求する地球世界の課題」について

『解説』には、この項目について、「地球世界の課題に関する適切な主題を生徒に設定させ、探求する活動を通じて、資料を活用し表現する技能を習得させるとともに、『これからの世界と日本の在り方』や『世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現』について展望させる」とある⁽²⁶⁾。

そのような内容の活動は、「世界史」より「現代社会」や「地理」などの科目内で行う方が適切ではないか、とも思われるが、その点も同解説は踏まえており、それらの科目との兼ね合いから、「『世界史 B』においては、歴史的観点に基づいて探求するように指導することが肝要である」と指示されている⁽²⁷⁾。

すなわちこの活動を行わせる際のポイントは、「現在我々が抱えている克服すべき課題は、須く過去（＝歴史）に遡って探求すべきものであり、その探求なくしては未来において克服へと向かうことは困難である」ということを生徒に理解させるという点にあるだろう。

これは「我々は何のために歴史を学ぶのか」という根源的なテーマにつながるものであり、その重要性は論を待たない。むしろ、③より容易に、生徒はその意義を理解するのではないか。

③が④の前に置かれている理由は、④の活動が「資料を活用して」行われるべく指示されているためではないかとも思われる。すなわち、④を行う前提として③で歴史資料の重要性や活用法を学んでおいてほしい、ということのようにも読み取れるのである。

しかし、③で扱う資料と④で扱う資料との間には、少なくとも『解説』の文中に掲げられた具体的指導の例、あるいは前出の二種類の検定教科書に挙げられた事例を見る限り、大きな差がある。前者の資料として提示されているのは、マカートニーの日記やホガースの絵画などであり、後者の資料として提示されているのは、ブラックアフリカの飢餓人口の棒グラフや穀物価格の折れ線グラフ、さらには資料の渉猟先としての政府機関や博物館のウェブサイトである。

この両者の、一見全くベクトルの異なる資料およびそれを分析するという活動の間には質的差異はなく、むしろ連続するのである、ということ、生徒に理解させる必要がある。さもなくば、③の活動と④の活動がそれぞれ全く孤立してしまうであろう。

その具体的アプローチは、個々の教員に任されているのである。従ってこれも、一定程度以

上の指導力を教員に要求するものであると言える。

おわりに

本稿では、新学習指導要領「世界史 B」が従前のものと比較していかなる点において変更されたかについてまとめ、その変更に基づいて実際の検定教科書がどのように記述を改めたか、複数の教科書について具体的に調査した。その目的は、実際に教員が授業を運営する上で新たに留意すべき点は那邊にあるのかを、新学習指導要領に基づく授業がスタートしたばかりの現時点において指摘することにあつた。

その結果、教科書記述上の変更諸点のうち最も大きいものは、「主題を設定して行う学習」に関する各項目に対応する箇所であり、全く新たに頁が追加されているに等しいことが確認された。かつ、それらの記述はその項目の性格上、生徒が自ら主題を設定する際の「具体例」および「注意点」を提示するというガイドライン的なものにならざるを得ず、教科書の他の頁の記述（我々が歴史教科書の記述として一般的にイメージできる記述）の流れから独立した頁となっていた。そしてそれらの頁の内容は、具体的記述は勿論、方向性からして、教科書ごとに全く異なっていた。

個々の教員は、そのような実情に対処する必要があることになる。そもそも、生徒自身に主題を設定させて行われる活動である以上、同一教員が同一学年を担当するにしてもクラスが異なれば全く異なった授業が展開されることになるのは自明である。そして教科書はその授業のマニュアルとしての役割を、他の部分（教科書のほとんどを占める、歴史事項の説明）以上に限定的にしか果たし得ないと考えられる。

そこで、教員が「主題を設定して行う学習」の各項目に該当する授業を実施する際に注意すべきと思われるポイントについて、本稿の最後で指摘を試みた。あくまで私見と言うことになるが、この学習を通じて、歴史を学ぶ際に本質的に心得ておきたい「因果関係を理解することの重要性」や「地域間交流を意識することの重要性」に気づかせることになること、さらには一段進んで「資料を分析して事実を特定し歴史像を描くことの意義」そして「歴史を学ぶという、そのこと自体の意義」まで習得すること、が視野に入ってくると考える。

これは、成就すれば大変意義深い学習になると言えるだろう。しかしその成否の鍵を握っているのは、一にも二にも教員の指導力である。

検定教科書は本来、全国的に均質な教育を生徒に施すことを可能にする目的で、教員の指導をサポートするために存在すると言えるだろう。しかし本項目に限って言えば、現況ではまだ

その役割を教科書に期待しづらい状況にあると言えるのではないか。

将来は現場からの報告が教科書作成の場にフィードバックし、それによって教科書の該当部分の記述も高いレベルで均質化するように訂補されていくことが期待される。

しかしそうなって以降も、「主題を設定して行う学習」はその性格上、教員の指導力が授業の質に直結するという点において変わらないだろう。従って今後、現場での経験が情報として蓄積され、それを共有し討議するなどといった、教員および教科書作成者側の努力が、授業の質的向上に必要であろう。それは「世界史 B」の他の項目、あるいは他の科目にもましてそうであると考ええる。

注

- (1) 教育出版、平成 22 年 6 月。
- (2) 『高等学校学習指導要領』第 2 章第 2 節 地理歴史 第 2 款 第 2 世界史 B 2 内容 (1) 世界史への扉 (前掲『解説』付録 3 に所収、同書 146 頁)。
- (3) 『解説』第 1 章 総説 第 1 節 改訂の趣旨、同書 1-10 頁。
- (4) 以下特記なき限り、本稿中で『詳説世界史 B』に言及する場合は、この版を指すものとする。
- (5) 『詳説世界史』の名で山川出版社より発行された最初の教科書は、昭和 34 年より使用されている (81 山川高社 10-1051、村川堅太郎・江上波夫・林健太郎著、昭和 33 年検定済)。但しそれ以前から『(高等学校) 世界史』の名で、共通するスタッフの手になる教科書が同じ山川出版社から発行されている。管見の限り、『詳説世界史』の叙述の基礎の確立は、その刊行開始以前に遡る。
- (6) 『詳説世界史 B』4-5 頁。
- (7) 同書 85-87 頁。
- (8) 同書 91-92 頁。
- (9) 同書 190-191 頁。
- (10) 同書 96-97 頁。
- (11) 同書 174-175 頁。
- (12) 同書 304-305 頁。
- (13) 同書 417-418 頁。
- (14) 尾形勇ほか 10 名著、平成 25 年 2 月発行。以下特記なき限り、本稿中で東京書籍『世界史 B』に言及する場合は、この版を指すものとする。
- (15) 同書 7-14 頁。
- (16) 同書 92 頁。
- (17) 目次中に凡例として「このマークのある箇所は、世界史のなかの日本史という観点で、世界と日本とのつながりや同時代の日本に注目したものです」と説明されている (同書 6 頁)。
- (18) 同書 109-110 頁。
- (19) 同書 177-178 頁。
- (20) 同書 281-282 頁。

高 津 純 也

- (21) 同書 420 頁。
- (22) 前掲『解説』 35 頁。
- (23) 同書 38 頁。
- (24) 同書 42 頁。
- (25) 東京書籍『世界史 B』の当該頁が「歴史研究への挑戦」というサブタイトルを掲げている（前述）理由も、一般的な高校生が「世界史 B」で習得可能な範囲を超越するような困難さを本項目が内包していると、著者が考えているためではなかろうか。
- (26) 前掲『解説』 46 頁。
- (27) 同書 47 頁。